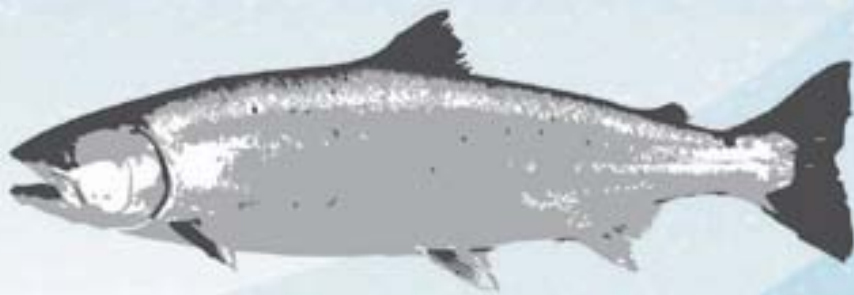


魚と水

Uo to Mizu



48-2

目次

長澤有晃さんの思い出	・・・・・・・・栗倉輝彦	1
第12回えにわ湖慈しみフェスタに参加しました	・・・・・・・・長島正幸	10
サイエンスパークの出展結果	・・・・・・・・長島正幸	12

長澤有晃さんの思い出

栗倉輝彦

長澤有晃さんは、2011年6月22日の午後2時31分、80才5ヶ月間の生涯を終えられ天に召された。奥様は3年前の2008年10月11日にご逝去されたが、葬儀は同じ教会であった。

長澤さんは、水産学部の4年先輩にあたり、北海道さけ・ますふ化場に勤務されており、本場勤務時代は、中の島の近くの公宅であったことなどから、交流の機会があった。しかし、国際協力事業団(JICA)の専門家として、チリ国に派遣されるようになってからは、あまり交流の機会がなくなっていた。

これは、チリ国で長澤さんが関係していたプロジェクトと全く関係が無かったが、1979年1月にJICAがお世話をするアルゼンチンの研修生3名が来道した。同年、5月30日付けのアルゼンチン国ネウケン州知事の礼状によると、

その3名は Juan Ruben Garcia、Norberto Llantada および Alejandro Del Valle であったが、札幌滞在中、当時、小生が担当していた上川町のニジマス養殖場の魚病検査に一泊どまりで連れて行くことになった。スペイン語の通訳が一緒だったが、Alejandro だけが、英語が達者であり、旅館の食事の後、飲みに行ったバーで、色々な話をした。実はこの年の10月から海外研修でアメリカ、カナダおよびヨーロッパに3ヶ月間出張することが内定していたので、実習のつもりで話していたのだと思うが、Alejandro とはすっかり打ち解け合うことができた。なおこの時、Alejandro は31才、小生は43才だった。

北海道での研修が終了して、本州に向かう時、空港に向かうバス停で「アスタラビスタ・アミーゴ」と言って、握手をして別れたが、同年5月30日付けの礼状がアルゼンチン国ネウケン州知事から届いていた。



左から2番目が Alejandro Dell Valle (1979年1月27日)

それから9年程が経過して、チリ国で仕事をしていた長澤さんがアルゼンチン国ネウケン州のプロジェクト・リーダーに変わられたことを知って、9年前に頂いたネウケン州知事の礼状のコピーを同封して手紙を書いた。

まもなく、長澤さんから興奮された以下のようなお便りが届いた。

「同封あったネウケン州知事の貴兄宛礼状、誠に奇しき縁、礼状に示されている Alejandro Dell Valle はまさしく、現在 私のカウンター・パートであり、私が所属する事務所の所長です。彼は今でも時々、日本へ行った時の思い出話を花を咲かせますが、その記憶力の抜群さは舌を巻く程です。しかし、さすがに人の名前だけは不鮮明で、北海道で誰に逢ったか知りませんが、とにかく皆さんに大変親切にされ、大変な親日家になっています。親日家になるか、ならぬか、ここが日本研修受入れで最も重要なポイントであり、親日家となって帰国すれば、その研修はそのことだけで、大成功というものです。

Alejandro は性格も良く、明るい好人物で、私共（女房にも）には大変親切に、気配り、恐縮してしまう程です。お礼を言う毎に彼は「トンデモナイ、自分が日本で受けた親切から比べると10分の1もない。もっと何か出来ることがあれば、嬉しいのだが」と言っております。

日本で、何処のどなたか知らぬが、彼に親切にしてくれ

たお陰で、今9年後に私がお返しを受けている訳です。心秘かに、日本の彼に親切にしてくれた人に感謝していたところでした。その1人が我が旧友栗倉兄だったとは、本当に意外であり、世間の狭さを改めて感じます。そして、人との出会いが如何に素晴らしい事であり、大切にすべき事であることも知らされます。

この礼状を Alejandro に見せたら、彼もおドロキ、それを今まで保管されていた事、ドクトル・アワクラが自分の事を憶えてくれた事、そして私が貴兄の友人であった事 etc の運命の糸の織りなす不思議な縁に感動していました。

貴兄の便りにもあったと通りの陽気な好人物で、毎日楽しく接触しています。勿論、仕事となれば業務上の日・ア相互にゆずれぬ面もありますが、好意が基礎にあるので、特に問題となることはなく、相互に理解と友情をもってやっております。

こちらとしても、魚病部門の協力があり、ひよっとしたら栗倉兄に短期で来てもらう事になるかもしれません。その時は万難を排して来ア下さい。」

以上のようなきっかけで、1990年5～6月にアルゼンチン国ネウケン州に魚病対策の短期専門家として、27日間出かけることになったが、Alejandro さんとは11年ぶりの再会となった。

ネウケン州知事の礼状

Señor Gobernador de la
Provincia del Neuquén
Gr. Br. (R) DOMINGO MANUEL TRIMARCO
Casa de Gobierno
Roca y Rioja
8300 - NEUQUEN
ARGENTINA

May 30, 1979. -

Dr. TERUHIKO AWAKURA
Chief
Section of Fish Pathology
JAPAN


Dear Sir,



As Governor of the Province of Neuquén, Argentina, I wish to thank most deeply for your excellent hospitality extended to Mr. Juan Ruben García, Mr. Norberto Llantada, and Mr. Alejandro Del Valle, public officials of this government who have attended a technical training course in Japan from January to April, 1979.

The benefits of this specialization, will surely be of great importance to our Province and to our Government as well. I want to restate my deep gratitude to you, to your people and to the Japanese Government for the valuable assistance and cooperation received.

Sincerely yours


DOMINGO MANUEL TRIMARCO
Gr. Br. (R)
GOBERNADOR DE LA PROVINCIA DEL NEUQUEN



ネウケン州中央生態学試験場 (CEAN) 場長 Alejandro Del Valle と



長澤さんご夫婦：スタッフの家族と共に



長澤さん宅での送別会 左端 : Alejandro、 後列左端 : Claudio Omar Coria



Alejandro 宅での夕食ご招待 (左端 : 美人の奥さん)

開高健は魚釣りの旅行記「オーパ」を書くため、アルゼンチンを訪れ、ネウケン州のフニン・デ・ロスアンデスも訪れているが、その時、試験場の場長は Alejandro の奥さんのお父さんで、まだ結婚する前の奥さんを「大変な美人」と書いています。お会いしてみたら、本当に大変な美人であった。(この時、長澤さん:59才、小生:54才)

長澤さんとは、一月に一往復の航空便によるクラシックな文通とインターネットが普及し始めて、デジタルのお付き合いもあり、帰国後は何度かご自宅にお邪魔して、機器類の調整のお手伝いをする事もあった。また、長澤さんが使用していた出始めの頃のデジカメを譲り受け、最近まで「顕微鏡写真撮影用」に使用していた。



ご自宅前で (1998年12月30日)
後ろにシートを被っているのは、ご自慢の1945年製のジープ



ご自宅の書斎にて (1999年5月16日)
壁にかかっているのはAlejandroが描いた魚の絵



JICAのパーティで演奏する長澤さん (1999年11月5日)



チリ会にて (2007年9月22日)



チリ会にて (2010年9月25日 手元にある長澤さん最後の写真)

ネウケン州の JICA のプロジェクトで小生のカウンター・パートになったのは、当時 32 才で、国立ラバンバ大学獣医学部卒の Claudio Omar Coria であったが、恵庭にも 6 ヶ月間と 3 ヶ月間の 2 回の研修に来て、魚病検査などの技術を習得され、JICA の協力によって整備された CEAN の魚病実験室で、魚病対策業務に当たっていた。

2001 年の 5 月、Omar さんが急死されたというメールが入った。ハンタウイルス肺症候群 (HPS) という病気で、発病後間もなく亡くなったそうである。この病気は、ネズミを介して感染するが、日本には媒介するネズミもウイルスも知られていないが、1996 年にネウケン州のエル・ボルソンやバリローチェでヒトからヒトへ伝染したと思われる 20 例が報告されたばかりであった。JICA の魚病対策専門家として訪れた 11 年後で、第二の職場に移ってからすでに、5 年間に経過していた。

国際協力は、JICA の他にも 1994、1995 年に FAO の依頼で、ネパールにも行ったことがあるが、仲介の人達が外国人であったこともあって、長澤さんが担当されていた JICA のプロジェクトのように旨くは行かず、その成果には、問

題があった。

それにしても、立派に育ったカウンター・パートの Omar さんが急死されたのは、本当に残念であったが、国際協力におけるプロジェクトの継続性の難しさを実感させられ、それ以来、個人的には国際協りに消極的になったように思う。

長澤さんの海外協力の業績は、チリ国におけるものが良く知られており、近年、特に注目をあびている。奥さんもスペイン語が達者であったことから、老後はお二人で、スペイン語を話す国々の旅行を楽しんでおられた。

小生の場合、長澤さんとの交流は、海外でのご活躍の後半にあたるアルゼンチン以降の 20 年間であったが、貴重な経験をさせていただいた。お世話になったことに感謝しつつ、長澤さんご夫妻のご冥福をお祈りする。

栗倉輝彦

(2011 年 7 月 7 日、76 才の誕生日)

第12回えにわ湖慈しみフェスタに参加しました

長島正幸

去る7月23日土曜日、えにわ湖慈しみフェスタに参加してきましたので、その報告と来年に向けて読者の皆さんへ参加を呼びかけたいと思います。

去年は、地方独立行政法人となり、名称も「さけます・内水面水産試験場」と改称したことから、初めての後援し参加することとしていしましたが、残念ながら雨天中止となり、本年はリベンジ参加です。

このフェスタは、恵庭ライオンズクラブ、NPO法人水環境北海道など、恵庭市内の11の団体をメンバーとした実行委員会が主催する漁川ダム及び道道恵庭岳公園線(117号)の周辺清掃を通じて、水道水源地の現状を知り、安全で安心な水を守るための環境

保全活動です。

当日は好天に恵まれ、市内外の20を超える団体企業から約250人が参加しました。まずは、9時からダム下公園で受付を終え、えにわ湖左岸の開会式場所へ、堤体斜面をチョイと登って軽く汗を掻きます。9時30分からの開会式後、更に奥の植栽場所へ移動して、水際に「サリカ」を植えました。写真のとおり六角形の紙製ポットを10個集めて置くだけの簡単な作業です。たくさんのサリカが根付いてくれることを祈ります。

続いて参加者は道道沿いに11箇所に分かれてゴミ拾いを行いました。私達「さけます内水試グループ」



(平井副場長、池田主査、私長島に、契約職員の菊池さんと高嶋さんが家族で参加、更に設備保守の竹之内さんが加わり総勢9名)は、NPO法人水環境北海道、(株)エコニクス、(財)石狩川振興財団などの方々と合わせて、20名程度で第2ポイントのゴミ拾いを行いました。

ポイントの駐車場からペンケチャラセナイ川沿いのダム管理道を土精橋下まで清掃しましたが、橋の下にゴミが集中して散乱、コンビニの弁当殻や缶類

が橋の両端に沿って落ちていました。大物は、灯油の90Lホームタンクでした。それから駐車場へ戻り、えにわ湖側の林の中へ。有ります、有ります！弁当殻や缶類などが笹の葉に隠れて、いくらでも出てきます。圧巻は、ブラウン管テレビ30～20インチものが4個、4、5人掛かりで急斜面を引き上げ、汗だくの作業となりました。



よくぞ、ここまで来て、捨ててくれましたと呆れ、腹立たしさが込み上げる作業でしたが、ケガなど無く、無事終了しました。12時、各ポイントから終了したグループがダム下公園に集まり、昼食のおにぎりとパン、ジュースを受け取り、芝生で寛ぎました。その間、交流会が開催され、恵庭北高のボランティア部の司会により、参加団体の紹介（さけ内水試は、中島主査がオプションプログラムを紹介）やビンゴゲームなどで盛り上がりました。閉会式の後、ダム下公園駐車場下にある流木等たい積場で、集めたゴミ



ミ山をバックに参加者全員で記念写真を撮りました。

オプションプログラムは、ダム堤体内見学、漁川に生息する魚の紹介、水質調査の実験をダム管理事務所前で行いましたが、ほとんどの参加者が帰ってしまい、数人がダム見学の後に、ダム事務所の方と一緒に内藤主査のお魚紹介トークを聞いて頂きました。

竹内研究主幹、中島主査、内藤主査には、見学者が少なく、何とも申し訳ありませんでしたが、貴重な休日に準備をして頂き、本当にありがとうございました。

晴天の中、たくさんのゴミを拾い、その活動の意義を感じつつ、来年は、もっと多くの人に「さけます・内水面水産試験場」を知って貰うよう継続して参画したいと思うところです。

(総務部 ながしままさゆき)



サイエンスパークの出展結果

長島正幸

今年のサイエンスパークは、8月4日と5日の2日間開催され、当試験場の出展日の5日に内水面資源部の皆さんと参加してきましたので、概要を報告します。

当日は、例年のおりサッポロファクトリーのホール会場、左手奥のスペースにブルーシートを敷き、魚の入ったプール2面を用意しました。10時の会場と同時に、ドゥーと子ども達が入場、タッチプールも子ども達にすぐ囲まれました。



今回用意した魚は、コイ、フナ、ウグイ、ドジョウが4種、カジカ類が3種、尾数は少ないが、ヤツメウナギ、川カレイが加わりました。もちろんアンモニーテスもいます。モクズガニも入れました。スジエビ、ヨコエビも多数入れたのですが、目立ちません(ほとんどが割栗石の底に隠れていた)。また今回は、シジミ、カラス貝、カワニナ、おまけにカタツムリを割石のオブジェに加えました。

当日は、湿度の高い夏日となり、スタッフは日照った手で捕まれる魚達が、何とか一日保ってくれるよう水温調整や、バイガモの切れ葉取りなどに、気を配ったり、来場人数のうねりが過ぎるとプール周りに飛び散った水を拭き取るなど、あれこれ動き回っていました。今回は、ペットボトルの氷を40本ほど用意したので、何とか水温上昇を避けることができました。



午前中、元気のあったウグイは、よくプールからジャンプして飛び出し、周りの子ども達を驚かせていましたが、午後に入ると元気がなくなり、捕まれても段々抵抗しなくなっていました。

ヤツメウナギやドジョウは、中々しぶといです。ヌルヌルと握りをかわすのですが、段々握力が強まり、子どもの細い指が腹部に食い込んだりするのを見かけると思わず、「優しくね、優しくしてあげて」と声を掛ける一場面も。子どもは、本当に捕まえる





ことに夢中になるようで、同行する母親等から声を掛けられるまでプールから離れない子も多く、中に

は、あちこちの体験の合間に何度も訪れる子がいました。

また、ヤツメウナギのような大きく、ぬめりのある魚を敬遠することもなく、女の子も結構、触っていました。スタッフは、それぞれ交代で、水ふきとティッシュ配りを続けていました。パーティションには、6枚の研究成果ポスターを掲示していましたが、今回は、スタッフに質問する方も少なく、プール周辺の賑わいに比べ少し寂しく残念でした。

午後になってもプール周辺の子も達は途絶えることがなく、水が濁ってきて水替え出来ずにいますから、とうとうウグイなどの他に、今回はヤツメウナギも1匹死んでしまいました。何とかペットボトルの水も使い切り、16時まで保たすことができ、よかったよかった。

スタッフの皆様、ご苦労様でした。

(総務部 ながしままさゆき)